

# 『源氏物語』研究

— 紫の上の幼少期に込められた意味 —

岩村 良子

## 一、はじめに

紫の上はよく遊ぶ、遊びが好きな少女として物語に登場する。それは、「(祖母の尼君が亡くなり、悲しみから) 例のやうにも遊びたまはず」(若紫・二四九) という描写からも窺える。少女期の紫の上は、「遊び」という個性が付与されて造型されているのである。例えば源氏が祖母を亡くした紫の上のものを訪れ、二条院に誘った場面である。源氏は「いぎたまへよ。をかしき絵など多く、雛遊びなどする所に」(同・二四五) と説明する。紫の上は「例ならぬ人」(同・二四三) の源氏を何となく気味悪く思いながらも、「いといたうも怖ぢず」(同・二四五) と感じた。このとき源氏がやさしく声をかけたばかりでなく、紫の上の「心につくべきこと」(同)、つまり絵や雛遊びの場として二条院を紹介したことに留意したい。紫の上は思わず「遊び」にひかれてしま

う少女として造型されており、その姿からはこの物語全体の「遊び」に注目する姿勢や、「遊び」との結びつきが窺える。

一つには、源氏の「心の慰め」である少女紫の上ならではの、葵上や六条御息所などの大人の女性とは異なる魅力として、幼さを強調する目論見もあるう。しかし、紫の上の「遊び」にはそれ以上の意味があるのではないか。紫の上は、当初「めでたき人かな」(若紫・二二四) と源氏に対して憧れのような好意を抱いてはいたが、いきなり御帳の中に入ってきた時には「うたて、(中略) 恐ろし」(同・二四三) く思ったし、後に実際に二条院に拉致されてしまったときも「あやしと思して泣い」(同・二五五) ている。二条院到着後、紫の上は「いとむくつけう、いかにすることならむとふるはれ」(同・二五六) ていた。そうした紫の上の心を落着かせたのは、約束通りに源氏が与えてくれた「をかしき絵、遊び物ども」(同・二五七) であった。紫の上

はそれらに興味をひかれ、「何心なくうち笑みなど」(同・二五七—二五八)し、源氏もそのかわいらしさに思わず笑みをこぼしている。そして落ち着きを取り戻した紫の上は二条院を見渡し庭の風情を感じ、二条院を「げにをかしき所かな」(同・二五八)と思うようになる。つまり紫の上は源氏が差し出した「遊び」をきっかけとして二条院への略奪を受容していくのである。以上のように、「遊び」は紫の上と源氏の関係の質というばかりではなく、そもそもその関係が形成され得たことそのものに、密接に関わっているのではないか。

振り返れば、紫の上は「きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりやあらむと見えて(後略)」(若紫・二〇六)と、遊びの中から登場してきた少女であり、「遊び」と結びつくことは、源氏に引きとられる前も後も変わらない幼い紫の上の特徴であった。「走り来(同)て、「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」(同)と尼君に訴える紫の上の「遊び」は、殺生戒などという大人の理屈の外で無邪気に思うままに遊ぶ、のびのびとした姿がある。なかでもとりわけ生き生きと描かれる「雛遊び」を取り上げたい。紫の上が雛遊びに興じる姿は、源氏に引きとられる前も後も描写され、繰り返して物語の中に現れる。以下は紫の上が関わる雛遊びの場面である。

①雛遊びにも、絵描いたまふにも、源氏の君と作り出でて、きよらなる衣着せかしづきたまふ。(若紫・二二四—二二五)

②雛など、わざと屋ども作りつづけて、もろともに遊びつつ(後略)  
(若紫・二五九)

③例の、もろともに雛遊びしたまふ。(紫の上は)絵など描きて、色どりたまふ。よろづにをかしうさび散らしたまひけり。我(源氏)も描き添へたまふ。  
(末摘花・三〇五)

④いつしか雛をしすゑてそそきゐたまへる、三尺の御厨子一具に品々しつらひすゑて、また、小さき屋ども作り集めて奉りたまへるを、ところせきまで遊びひろげたまへり。「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」とて、いと大事と思いたり。(紅葉賀・三三〇—三三二)

⑤出でたまふ気色ところせきを、人々端に出でて見たてまつれば、姫君も立ち出でて見たてまつりたまひて、雛の中の源氏の君つくろひたてて、内裏に参らせなどしたまふ。

(紅葉賀・三二二)

『源氏物語』において雛遊びは、例えば雲居雁に対して夕霧が「はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねむごろにまつはれ歩いて、心ざしを見えきこえ」（少女・三三）ていたり、「まだいはけたる御雛遊びなどのけはひの見ゆれば、（中略）雛の殿の宮仕いとよくしたまひて」（螢・二二七）と明石の姫君の雛遊びに夕霧が付き合う姿が描かれるものの、紫の上の遊びのように深く掘り下げては描かれない。また、うつほ物語や狭衣物語など、他作品で描かれる雛遊び（後述）も「誰と」雛遊びをしたと語る、雛遊びの有無を語る叙述であるのに対し、紫の上の雛遊びでは、遊びの内容への具体的かつ個性的な言及があり、しかも後に深い関係を築く源氏と関連しつつ描かれているのが特徴である。なお、紫の上には絵との関わりも多く描かれるが、玉鬘など他の女君も絵を見て楽しむ場面があり、紫の上に特徴的とはいえない。特徴的な紫の上の雛遊びの叙述には何らかの意図があると考えられる。以下、雛遊びを通して形成されていく紫の上と源氏の関係の質を中心に、紫の上の「遊び」が描かれる意味について考察する。

## 二、紫の上の幼少期

### ―「雛遊び」を通じた源氏との関係形成

雛遊びは年少の女の子たちの「遊び」として顕著<sup>注1</sup>であり、例えば紫の上の他にも『うつほ物語』では、幼いいぬ宮が母である女一宮と「明け暮れ雛遊び」（楼の上<sup>下</sup>・五一六）している。雛遊びは幼い少女たちにとって楽しい、大好きな遊び<sup>注2</sup>であった。実態は明確ではない<sup>注3</sup>といわれているが、『夜の寝覚』に「絵かき、雛つくりなどして、見せたてまつりたまふ」（三八七）とあることや、先ほど挙げた①の描写から、少女たちは雛人形を思い思いに制作して人形に役割を与え、さらには『紫式部日記』に「小さき御台、御皿ども、御箸の台、州浜なども、雛遊びの具と見ゆ」（一六二）とあることや、②、④の描写から、雛の世界の中には立派な設えや調度品があり、それを作ったり並べたりした中で雛を動かして遊んでいたことがうかがえる。雛遊びはいわゆる現代の「ごっこ遊び」に通ずるもの<sup>注4</sup>と考えられる。「ごっこ遊び」は言葉や想像力が発達する三歳から五歳頃に盛んに遊ばれ、さらに大人の行動をまねる、まねぶ、学ぶことから社会的行動基準や規範、役割を学んでいく効果があると言われている。よって雛遊びについても、子どもの想像力を豊かにし、情操を養う役割がある

ことに加えて、人間関係や社会生活への認識を深め文化を吸収していくことが期待される<sup>注6</sup>。雛の世界は、作り手である少女たちが思い思いに自由に作り出すことができる一方で、⑤で紫の上が雛の源氏を参内させているように、現実社会に影響を受け、それをベースにして作られる世界でもある。こうした雛遊びは、「想像力」という「内」と「まねぶ学ぶ」という「外」から人間を形成していく二重性をもっている。雛遊びは少女の内的世界の表れであり、かつ外の現実世界を取り入れて己が内的世界を拡充形成していく、その意味では紫の上が人として成長していく過程そのものの表れといえる。

そして、その雛遊びに源氏が繰り返し関わっていくことにも、注目せねばならない。先に挙げた①から⑤について、i 源氏に引きとられる前か後かの「時間軸」、ii 源氏と雛遊びをしているか否かの「遊び相手」、の二点から整理してみる。すると、源氏に引き取られる前に一人もしくは源氏以外と遊ぶのが①、源氏に引き取られて以降源氏と遊ぶのが②と③、同じく源氏に引き取られて以降一人もしくは源氏以外と遊ぶのが④⑤の場面となる。まずは、源氏が紫の上と遊ぶ場面の意味を考えるために、他作品における主な雛遊びの場面と比較してみたい。

#### うつほ物語

・一の宮は、いぬ宮と雛遊びしたまふ。御かたち、日々に光りまさるやうにおはす。いみじき腹立ち、恐ろしき者の心にも、見たてまつらむに、よろづのこと忘れて笑まれぬべし。

(楼の上・四五四)

・雪山作らせたまひて、雛遊びなど、もろともにして見せたてまつりたまふ。

(楼の上・五三三)

・女君、御髪喝食ばかり、いとをかしげにて、雛遊びしたまふ。御達三十人ばかり、童あまた。

(国譲下・三三三)

#### 狭衣物語

・「雛や持ちたまへりや。恥ぢたまはで、こなたに遊びたまはば、いみじう作りて奉りてんかし。若宮の多く持ちたまへる遊び物ども、取りて奉らん」などのたまひて、さまざまをかしき絵など描きつつ奉りたまへば、もとよりいとなつかしき御心にて、うち笑ひ、物などのたまへるも、あさましきまで写し取りたまへるは、なかなかなる御心惑はしなり。

(卷三・一二〇—一二二)

## 夜の寝覚

・昼は御帳のうちに、二所（寝覚の上と石山の姫君）、絵かき、  
雛つくりなどして、見せたてまつりたまふ。  
（三八七）

他作品では、雛遊びは父や母が「保護者」の役割を担って少女（娘）と雛遊びをすることが多く、そうでない場合は乳母や女房、同世代の童たちと遊んでいる。<sup>注7</sup>総じて姫君にとって近しい存在、親しみ深い人が、雛遊びの相手を担っているのである。ところが幼い紫の上にとってもと源氏は、「めでたき人」ではあるが近寄られれば「例ならぬ人」であった。血縁者ではない赤の他人なのだから、「例ならぬ人」と思うのは当然の反応であるだろう。この赤の他人の男性（源氏）を、生涯を共にする「近しい人」として少女の内的世界に受容していくという、『源氏物語』固有の男女関係が形成されていく過程を叙述するに際し、少女が近しい人と分かち合う「雛遊び」が寄与している。源氏が紫の上の創り出す雛の世界に入り込んで、紫の上と内的世界を共有することは、紫の上にとって、自分の世界に源氏が伴侶として存在する状況を、現実世界でも肯定していく助けとなっていよう。「光源氏」は若紫の手の内にあり、いつでも彼女と身近に向き合う存在となつていくと言われるように、父母や乳母ではない源氏が紫の

上の雛遊びに深く関わることで紫の上は、生涯を共にする伴侶、かつ肉親にも同じ「近しい人」として源氏を受容しながら成長していくのである。だが、②や③のように、雛遊びを通じて源氏と紫の上の距離が縮まっていくなかで、一方で源氏不在の雛遊びもしばしば叙述される点に注意しよう（①④⑤）。特に①と⑤では、源氏が紫の上の雛の世界で「きよらなる衣」を着ていたり、「内裏に参」っているなどリアリティを持って存在している。①は、「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」（若紫・二三四）と女房から言われた紫の上が、うなずいて「いとようありなむ」（同）と思つた後の遊びの場面である。このとき紫の上が作つた源氏の人形の役割は、女房との会話（子になりて・・）から考へると、「わたし（紫の上）の父親」であつたのではないか。直前に、源氏の姿を見て「幼心地に、めでたき人かな」（同）と感じており、源氏に引き取られる前であるから、源氏はまだ憧れの域を超えぬ対象として登場しているのだろう。しかし、「親」という形にせよ源氏を意識し、親しみをもち、自らの内的世界の表れである雛遊びの一員として取り込んでいることに留意したい。続けて④と⑤の場面を見ると、ここで紫の上は「十にあまりぬる人は、雛遊びは忌みはべるものを。かく御男などまうけたてまつりたまひては、あるべかしうしめやかにてこそ、見えたてま

つらせたまはめ。」(紅葉賀・三二一)と少納言からの戒めを受けて、心の内に「我はさは男まうけてけり、この人々の男とてあるはみにくくこそあれ、我はかくをかしげに若き人をも持たりけるかな、と今ぞ思はし知りける」(同・三二二)のだった。つまり源氏との雛遊び(②と③)の次の、源氏を介さない雛遊びの場面、源氏を将来の夫として漠然と自覚する紫の上が描かれるのである。のちに紫の上は、新枕で大きな衝撃を受けるので、「我はさは男まうけ」と言いつつ、実際のところは男女の実感は薄かったのだらうが、「御年の数添ふしるしなめりかし」(同)ともあり、ここでは源氏の子どもになることを肯定していた①の頃から、さらに男女の関係に一步踏み込んだ認識となつてゐる。これは、紫の上の感情が外に向いてゐると指摘されるように、雛遊びを通じて、やがて妻となつていく自分の現実世界の枠組みに源氏を受け入れる準備が整えられた表れであろう。だがそれは、あくまで紫の上自身が肯定する形で描かれてゐる。紫の上は雛遊びによつてまず源氏と言う存在を受け入れるが、その遊びの空間に作られた想像の世界にとどまらず、源氏を自分の現実の中に位置づけるという過程を、無意識のうちに自ら行つてゐるのである。

ここで、絵を中心に、雛遊びと他の「遊び」を比べてみたい。絵は、雛遊びと並び源氏との関わりの中で紫の上の身近に登場

する「遊び」である。絵を描くことや見ることは、雛遊びと同様、当時の子どもたちにとつて楽しみであり、子どもたちの日常生活を豊かにする<sup>注10</sup>とともに、気晴らしとなる遊びであつた。源氏も紫の上に「をかしき絵などをやりたまふ」(若紫・二四七)と絵を贈つてゐる。紫の上も絵が好きだつたようである。二条院につれてこられたとき、源氏が与えた遊びの数々に心を落着かせた紫の上は辺りを見渡し、二条院の庭が「絵にかけるやうにおもしろ」(同・二五八)いことに気がつく。そして「御屏風などもなど、いとをかしき絵を見つつ、慰めて」(同)いた。もつとも印象的なのは、「絵など描きて、色どりたまふ。よろづにをかしうさび散らしたまひけり。我も描き添へたまふ」(末摘花・三〇五)という、源氏が末摘花を念頭に絵を描き、自分の鼻にも紅をつけて、紫の上と戯れる場面であろう。本当に源氏の鼻が赤くなつてしまわなかつたかと心配する紫の上は純粹で無邪気な少女であり、温かくほほえましい描写である。また、「大殿油まゐりて、絵などもなど御覧する」(紅葉賀・三三三)ときに、源氏の外出の合図を聞いて「絵も見さして、うつぶして」(同・三三三)いる紫の上のいじらしさに源氏は外出をやめている。絵がある環境の中で、源氏と紫の上が交流を深めていく様相が確認できる。紫の上と源氏がこのときどのような絵を見ていたのかは定かではないが、一応諸注

は「物語絵」としている。また、源氏が紫の上に送ったのは「女絵」という美しく彩られた「つくり絵」で、一枚一枚の「紙絵」であつたらしく、このような紙絵は並び変えたり書き加えたりすることで同じような筋をいくらでも自由に作りだすことができたものだつた。<sup>注11</sup>絵は見る者、描く者の想像力を刺激し、時には自ら絵を組み立てながら、現実とは違った絵の世界に入り込むことが楽しみであつた。絵という遊びも、雛遊びと同様に絵の世界や想像力を二人で共有することで、心を通わせる契機であつたのだ。

川名淳子氏は絵について、「ここで紫の上と源氏が見ていたのは、美しい姫君が貴公子に求愛され、幸福な結婚をするというごく単純な恋物語であつた」<sup>注12</sup>としている。男女を描く絵を見ることが、男女が愛し合うイメージ、たとえば男女のあり方、恋の仕方のイメージが心に刷り込まれていくとすれば、絵はより教育的であるとも評せよう。さらに紫の上に絵を贈り、自ら末摘花の絵を描いて紫の上と戯れるなど、絵の「遊び」では、源氏の方から紫の上に働きかけていた。つまり、絵の「遊び」では源氏にイニシアティブがあつたと考えられる。また、「遊び」という観点からは少し離れるが、手習や琴を紫の上に教えるのも、源氏主導であつた。和歌や音楽は姫君教育の一環であり、より教育的な面が強い。自分で自由に遊ぶことが許される「雛」「絵」とは異な

り、「作歌」「音楽」「書道」には、習得せねばならない「型」があり、それらの習得こそが、教養ある姫君となるための必修の条件であつた。「うちそばみて書いたまふ手つき、筆とりたまへるさまの幼げなるも、らうたうのみおぼゆれば、心ながらあやしと思す」(若紫・二五九・手習を教える場面)、「戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり」(末摘花・三〇六・絵を描く場面)、「いとうつくしう弾きたまふ。(中略)御手つきいとうつくしければ、らうたし」(紅葉賀・三三二・琴を教える場面)など、雛遊び以外で源氏が紫の上と交流する場面が叙述されるのは、おしなべて紫の上が源氏に理想の女性として育てられていることを示すためといえる。源氏に理想の女性として育てられているさまの叙述という点では、碁の場面も同様であろう。碁を打つ紫の上の姿は、新枕直前に登場する。碁は中国渡来の複雑なルールをもつ、沈思黙考を必要とする行為である一方で、対局の際には賭けや勝敗が加わる高度な「遊び」(競技)である。「ただこなたにて碁打ち、偏つぎなどしつ」(葵・七〇)と、漢籍の教養が必要な偏つぎと並べて叙述される「遊び」なのである。新枕後、なかなか起きてこない紫の上に対し、「今日は碁も打たでさうざうしや」(同・七二)と声をかける源氏は、自身の理想通り成長した才氣にあふれた紫の上と交流したいという気持ちがあつたように

思われる。以上のように、「絵」や「碁」、「作歌」「音楽」「書道」と言った叙述は、紫の上がきちんと育てられてきた表れであり、源氏が紫の上の魅力を感じ取るさまを描いている。

雛と絵については、従来から同様の役割をもつものとして並列して評価されることが多い<sup>注13</sup>。特に川名氏は、「雛は実は物語絵に描かれた男君や女君を立体的に立ち上げ、動きをつけ、物語の内容をシュミレーションするような役割があった」とし、雛と絵を互いに連鎖する関係<sup>注14</sup>ととらえている。しかし、紫の上の雛には「男君」「女君」といった男女の物語はさほど展開されていないように思う。先ほど紫の上の雛遊びの場面を挙げたが、雛遊びは、まずは紫の上自身が一人あるいは源氏以外と遊ぶ場面が描かれており、雛遊びの想像世界の一員として、紫の上が源氏を受け入れていくさまが丁寧に描かれている。紫の上は雛遊びを通じて源氏を「近しい人」として受容する。源氏は「もろともに」参加することで紫の上の雛遊びの世界に入っていく。絵とは違い、雛遊びでは紫の上の主導のもとに遊びが成り立っていると考えられ、そこに色恋沙汰は薄い。それは前節①の雛遊びの場面で、源氏を「自分の父親」として認識している紫の上の姿からも確認できる。紫の上の雛は男女が愛し合って夫婦になるという男女のあり方、恋の仕方を教える面から見れば非教育的である。だが一方で

紫の上が源氏を将来の夫と自覚した契機は絵ではなく雛遊びで、さらに、源氏からの働きかけによるのではなく少納言から注意されて受け入れていくという形で描かれる。源氏の思惑とは別の預かり知らぬところで、紫の上は男女関係において精神的成長を遂げていたのである。雛遊びに興じる姿を丁寧に描くことで、単なる恋愛関係の男女というのではない、自らの成長と主体性によって、赤の他人でない肉親同様に近しい人として、伴侶の光源氏を受容していく紫の上が描かれている。紫の上の主体性を描くために、「遊び」、それも「絵」だけでなく「雛遊び」こそを詳述する必要があったのである。もっとも、全体として見れば「雛遊び」は「絵」「碁」などの遊び、そして「和歌」「音楽」「書道」という教育につながっており、源氏の「娘」から「女君」へと成長する紫の上を描き出している。それは「娘」から「女君」に地続きにつながる、「人よりことなる宿世」（若菜下・二二二）の叙述であるのだが、その固有な関係ゆえの苦しみは、後述のように若菜巻以降の紫の上の物語の主題となっていく。

紫の上が源氏を夫と自覚して以後、紫の上の雛遊びの姿は描写されない。この理由について、紫の上が成長するにつれて急に物語から消えてしまう少納言の乳母の役割から考えてみたい。少納言は、尼君が亡くなった後に、「『寄る波の心も知らでわかの浦に



玉藻なびかんほどぞ浮きたる　わりなきこと」と聞こゆるさまの馴れたる「若紫・二四二」と、紫の上の保護者的存在となつて幼い紫の上の将来を思いやり、さらに源氏が紫の上を引きとる過程において「(源氏のもとへ)押し寄せ」る(同・二四三)など二人を結びつける役割を担っていると言われている。しかし、二条院に紫の上が引きとられた後は、少納言の描写は少なくなる。対して紫の上の雛遊びは、むしろ二条院に移った後に頻繁に登場する。源氏と紫の上とを結びつけ、物理的距離を縮めたのは少納言であつたにせよ、もとは赤の他人の二人の心の距離を縮めたのは、紫の上自身の雛遊びだったのではないか。通常の男女は、少納言のような女房の手引きで物理的に近づけられ、そのまま恋愛関係に移行する。だが、源氏と紫の上という、特異な男女の心の結びつきを描こうとする『源氏物語』は、女房のみならず「雛遊び」を通じて、距離を縮める二人を描いている。そしてその役割を完了した結果、雛遊びの場面は描かれなくなるのである。

また、「少納言」の役割としては、紫の上を親身に思い、支え続ける側近女房(乳母)という点も挙げられる。紫の上がきちんとした妻に成り得るかを危ぶみ、源氏との新枕を喜び、妻として社会的に認められたことを嬉しく思う。源氏の須磨退去に際しては、紫の上とともに源氏の地券を預かり、源氏の妻となる過程を

支えている。しかし、源氏が須磨から戻った後には、全く物語に登場しなくなるのであつた。この不在について、源氏の今後の女性関係(例えば、源氏の召人が紫の上のもとに集まるなど)による苦悩を紫の上に寄り添い受け止める存在の不在、紫の上の「孤立」が指摘されている。親という「家」、家邸など「資産」、さらには女主を親身に思う「乳母(側近女房)」までが失われ、「雛遊び」ほかの遊びや教育に描かれてきた、源氏との「親子」からつながる「男女」関係、特異な結びつきが試されていくのである。それは、「遊び」というプライベートな空間を通してのみつながる二人の関係の危うさを問うことでもある。

紫の上の「遊び」は、例えば「走り来たる」(若紫・二〇六)など、思うままに遊んでいるイメージがあり、自由で型破りなところもある幼い少女として描かれていた。雛遊びにおいても「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ」と、誰に管理されるでもない自由な「遊び」となっていた。そこに「夫」とは違う形で、源氏が入り込み、紫の上と心の距離を縮めていく。「肉親」のように共に雛遊びに興ずる姿は、源氏を「夫」としてだけではなく肉親でもあるような、変わることはない紫の上と源氏の強固な心の結びつきを描写するために必要だったのである。

### 三、回想される紫の上の幼少期

#### — 紫の上と源氏のずれ 若菜巻以降

「遊び」によつて源氏と馴れ睦ぶ紫の上は、たとえ源氏に「日常」と「心」を支配されているのだとしても、表面上では「遊び」によつて無邪気に、理想の女性に育てようという源氏の思惑をある意味無視するほどに、元気で活発な存在として鮮明に描かれていた。ところが新枕を経て、紫の上は自由な幼い少女から、源氏の「女君」として扱われるようになる。「雛遊び」のなかで、いわば二人だけの特異な関係、深い心の結びつきが育まれるさまが描かれてきたが、結局「女君」「男君」の男女の關係に組み込まれていくのだ。

新枕後、明石の君などの他者を挟んでの紫の上と源氏の心のかけ引きが具体的に描かれていく。紫の上は、新枕ののち、源氏が雲林院に籠つたときに消息をかわす場面で再登場する。その場面では、「風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかるささに」(賢木・一一八)と源氏の心変わりによる嘆きを歌に詠んでいる。源氏が「浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静心なき」(同)と読んだ切り返しであるが、源氏の変わりやすい心を理解し、不安を読みこむなど、さりげなく気持ちを歌に託してい

る。さらに、源氏の須磨退去が濃厚になるさなかに源氏が外泊をした際、他の女の所に行ったのではないかと紫の上は考えるが、「かかる世を見るより外に、思はずなることは、何ごとにか」(須磨・一七二)とだけ言うなど、慎み深く節度をわきまえて嫉妬する。他の女君を気にし、それに対する不満を口にするのである。

かつて紫の上は新枕に衝撃を受け、源氏の冗談言にも「いと苦しうわりなきもの」(葵・七七)と源氏を嫌に思い、「いよいよ御衣ひき被きて臥したまへり」(同・七一)と、姿を見せようとしなかった。それにも関わらず、紫の上がどのように源氏を受け入れ、困惑に折り合いをつけたのかの経緯は一切描かれず、「女君」として物語に位置づけられる過程は唐突である。これについては、「風吹けば」の紫の上の歌を読んだ源氏が、「けしうはあらず生ほし立てたりかし」(賢木・一一八)と思つていることもあり、賢木巻のこの場面を紫の上の成長の完成、理想性の確認のように読みとることもできる。しかし紫の上の側からみたとき、これまでの過去を振り返った様子は無く、雲林院へ籠つてしまつた源氏への恨みや寂しい気持ちも訴えもせずに心のうちに隠して、己が心細さを訴え源氏の心を引き留めようとしている。こうした紫の上の姿は「遊び」をとおして源氏と距離を縮めるという特殊な關係を経ていない、嘘や懸け引きのまつわたつた普通の男女の仲の「女君」

であるかのである。幼少期に無邪氣に源氏に慣れ睦んできた過去を、新枕前までの時間に置いてきたように、幼少期の思い出を自ら語ることも、心の内に振り返ることもない紫の上。かつての新枕の源氏からの歌は、「あやなくも隔てけるかな夜を重ねさすがに馴れし夜の衣を」(葵・七一)、これまで親子として臥所を共に親しんできた日々を愛おしみながら、今朝女君となった紫の上を慈しむという、この二人ならではの後朝の歌であった。このとき紫の上は返歌を拒み、源氏はその「女君」らしからぬ反応にかえって愛情を募らせもした。しかし賢木巻では理想の「女君」にふさわしい、「風吹けばまづぞみだる色かはる浅茅が露にかかるささがに」と、心變わりに翻弄される儚さを全身的に訴える歌を詠む。「娘」のように源氏の意図を理解せずに頼り切り、甘え親しんできた幼い自分を過去に置き去って、源氏の理想とする「女君」として新しい関係を築こうとするかのように、少なくともこのときの紫の上は、自らの身の上の心細さを自覚し、だからこそ夫の心を捉えようとする「女君」になっている。

一方で、それまでの親子のような密な関係は、源氏にとつてのみ、「生ほしたてたり」と、紫の上への信頼の礎、証として意識され、振り返られている。かつて、この親子のような信頼感は、源氏を癒すばかりでなく、尼君を亡くした紫の上の慰めとなり、

二人を密に結びつけてきた。しかしながら紫の上が「女君」となった途端、ずれが明確になる。「信頼」に内包されていた偏りが浮かび上がり、両者にとつての過去の絆の意味が変わってしまったのである。

こうした絆の変化とその意味を明らかにしてゆくのが女三宮降嫁である。藤壺の姪である女三宮は、期待に反して幼稚で張り合いのない人柄で、「かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしを思い出づる」(若菜上・六三)と、源氏は幼少の紫の上との違いを思わずにはいられない。さらに源氏は朱雀院の女三宮に対する教育を批判し、「さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、我ながらも生ほしたてけりと思す」(同・七四)と自分の紫の上への教育を振り返り、自信をもつ。女三宮の幼さは源氏にとつて、幼少の頃の紫の上の素晴らしさ、これまで築かれてきた二人の絆のかけがえなさを改めて噛みしめさせている。紫の上を「いはけなかりしほどよりあつかひそめて」(若菜下・二三)きたことは「見放ちがた」(同)い思いを掻き立て、源氏の紫の上への愛着を形作っている。さらに「隔てあるべくもならはしきこえぬを」(若菜上・八五―八六)と、隔てなき仲の継続を求める根柢にもなっている。紫の上に対する自身の教育の正しさを確認し、愛着をもち、信頼し合

う関係を築いてきたと、源氏は肯定的に捉えているのである。女三宮降嫁後、紫の上の気持ちに寄り添う源氏の発言は「あぢきなくや思さるべき」(同) 程度で、ほとんどが「誰も誰ものどかにて過ぐしたまはば」(同)、「あいなきもの恨みしたまふな」(若菜上・五三)、「ただおいらかにひきつみなどして教へたまへ」(同・八五)と、自分の要望や気持ちを教える言葉であった。しかしそれは、紫の上の幼少期から共に長い時間を過ごし、何があっても揺らぐことのない信頼、親子のような絆があるという偏った自負のなせるわざなのだろう。また、源氏は女三宮について語らずに、「ただ、『心やすくを思ひなしたまへ』とのみ」(同・七二―七三) 声をかけている。詳しいことを言わないのは、女三宮の身分に憚ったこともあるが、この時の紫の上は、家との縁が薄く、娘のように源氏に育てられたがゆえの、「心やすく」思いようもない、不安定で苦しい立場にある。にも関わらず、源氏の女三宮への失望という、「心やすく」思つてよい肝心な根拠を言わなくとも、自分の紫の上への愛がわかつてもらえるはずという、よく言えば無条件の信頼、悪く言えば甘えが窺えよう。こうした源氏の思考は、「などかくしも見放ちたまへらむ」(同・八五)と不安を感じつつも、紫の上の立場の不安定さに思いを致さずに、「ありしよりけに深き契りをのみ、長き世をかけて聞こえたまふ」

(同)と、ただただ愛を示すための言葉を重ねることで紫の上の心を繋ぎとめようとする箇所にも窺える。源氏は、紫の上の身の不安定さなど、二人の仲に関係ないかのように接していくのである。紫の上は、愛や心の結びつきとは異なる所で苦しみを抱えているのだが、源氏は紫の上と幼少から過ごしてきたことにより形成された心の結びつきを重視するあまり、紫の上の苦しみに寄り添わない。長年共に過ごし育て上げるなかで形成された隔てない信頼を無条件に信じ、揺るぎない拠り所と思うあまりに、紫の上の苦しみをどこか等閑視し、愛や思いを訴えればわかってももらえんと思つていたのである。

根底にあるはずの信頼を前提に愛の言葉を重ね、心をつなぎとめようと必死になる光源氏に対し、紫の上は女三宮を迎えた源氏に「すこし隔つる心添ひて」(若菜上・七九) いたと明記される。紫の上は源氏が受け取った女三宮からの手紙を「後目に見おこ」(同・七二) すが「見ぬやうに紛らはしてやみたま」(同) うなど、徐々に源氏に何も言わない態度を取り始める。そして、「人に劣り消たるることもあるまじけれど」(若菜上・六二)、「我より上の人やはあるべき」(同・八八) といった自分の六条院での位置を冷静に確認<sup>注18</sup>し、「思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ」(同・六五) と、源氏との夫婦仲が盤石ではなかったこ

とを理解する。そして臘月夜と再会する源氏に対して「昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」(同・八五)と「涙ぐみ」(同)つつ吐露し、「身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ」(若菜上・八八)と独り思うなど、自身のはかなさに思いを致す。このとき身のはかなさは、「見えおきたてまつりたる」、源氏に育てられそのままになった自分と源氏との過去を振り返らずにはおかぬ。女三宮降嫁以降、「さらばわが身には思ふことありけり」(同)と紫の上が気づき、見つめることになった「思ふこと」は、これまでの源氏との関係がはらむ社会的な不安定さであり、同じく源氏が女三宮降嫁以降自覚した心のつながりではないのだ。源氏は紫の上を「心の結びつき」という私的な関係でしかとらえられないため、社会的事実を目を向ける紫の上とはすれ違っていく。にも関わらず、源氏と紫の上の仲は「いとうるはしく睦びきこえかはしたまひて、いささか飽かぬことなく、隔ても見えたまはぬものから」(若菜下・一六六—一六七)と描写されるが、ここで紫の上は出家を申し出ており、「隔ても見えたまはぬものから」には、紫の上と源氏の意識のずれに対する皮肉がある。

紫の上は女三宮と対面後、彼女と良好な関係を築き、二人の関係について世間も「事なほりてめやすくなんあり」(若菜上・

九二)と評価し心配には及ばなくなり、源氏の寵愛も「御勢ひにはえまさりたまはず」(若菜下・一六六)と、今までと変わらず保たれていた。傍目には良好な関係であり、源氏の私的な愛情が、女三宮よりも紫の上の勢いがまさっているという状況をもたらししている。しかし、身のはかなさという社会的事実を思うとき、紫の上は苦悩を深めるほかない。結論からいえば、この意識のずれが、紫の上の苦しみの本質であるように思う。紫の上にとって自身の幼少期とは、身のはかなさを実感するための記憶となり、そこに源氏との拭いがたいずれが生じている。

君の御身には、かの一ふしの別れより、あなたこなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとなん思ふ。  
(略) 高きまじらひにつけても心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし。その方は、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや。

(若菜下・二〇六—二〇七)

「親の窓の内」とは、長恨歌第四句「養はれて深閨に在り人未だ識らず」(邸の奥深い部屋に育てられていて、世人もこの娘の

ことを知らない<sup>注19</sup>)をふまえている。それは、源氏によって「しやし殿の内の人にも誰と知らせじ、と思して、なほ離れたる対に御しつらひ二なくして、我(源氏)も明け暮れ入りおはして、よろづの御事どもを教へきこえたまふ」(紅葉賀・三一七)と育てられた紫の上の幼少期を思い出させる。源氏はこのような境遇から妻になった紫の上を幸運であったと言う。紫の上は肯定こそするが「心にたへぬもの嘆かしさのみうち添ふや、さはみづからの祈りなりける」(若菜下・二〇七)と返している。同じ「源氏に庇われ愛育された」過去に対しての、微妙に力点をずらした紫の上の言葉は、同じ過去が紫の上にとっては違うものとなっていたことを、何よりも雄弁にもの語っている。その紫の上は、源氏に対して「残り多げなるけはひ」(同)を漂わせている。源氏に自分を感じている本当の不安・嘆きなどを告げてしまおうかという迷いや、源氏との認識の違いによる哀しみの感情がこめられた「けはひ」であろう。しかし、紫の上は結局それを源氏に言い出すことはない。気持ちを抑圧し、具体的に思いを口にするとはなく、出家の承諾を再び願ひ出るのである。やはり出家を許可されず、「例のことと心やましくて、涙ぐみたまへる」(同・二〇八)と描写される紫の上からは、出家したい自分の心情を含めて何も自分の気持ちを分かってもらえずやるせない、どうすることもで

きない切ない思いが窺える。

その後、紫の上は「あやしく浮きても過ぐしつるありさまかな」(若菜下・二二二)と身の所在なさを思い、「げに、のたまひつるやうに、人よりことなる宿世もありける身ながら、人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身にてややみなむとすらん、あぢきなくもあるかな」(同)ということをきっかけに発病する。幼いころから源氏と親しんできたことに始まり、今までの紫の上の人生を回顧し、それを包括するなかで、発病に至るのである。これにより、「源氏に育てられた幼少期」によって自己の内に大きな苦しみを抱えていることが浮き彫りになるのである。

#### 四、幼少期に回帰する紫の上——捉え直し

発病した紫の上は、源氏の「言ふ限りなく思し嘆きて、こころみに所を変へたまはむ」(若菜下・二二四)という考えによって二条院に移される。紫の上は、一度は命が果ててしまったと思われたが、源氏の必死の加持祈祷などにより一命をとりとめる。そして回復に向かつていくのだが、紫の上が病にかかる前と後では、紫の上の描き方が異なっているように思われる。幼少時代を過ごした二条院に移ったことをきっかけに、発病までとは違ったかたち、異なる意味をもって、幼少期が振り返られていくように

思う。ここでは病前後の紫の上の描き方の変化と、そこに若紫巻から新枕に至る紫の上の幼少期がどのように関わっているのかに着目して考察していきたい。

まずは、病後の紫の上の描写である。紫の上は小康を得るが、相変わらず弱っており、源氏は「言はむ方なく思し嘆」(若菜下・二四二) いている。それを見た紫の上は、「わが身にはさらに口惜しきこと残るまじけれど、かく思しまどふめるに、むなく見なされたてまつらむがいと思ひ限なかるべければ、思ひ起こして」(同・二四二―二四三) いる。紫の上は病を経て、自分自身のためではなく、ただ源氏のために生きていくことを決意する。女三宮降嫁以来繰り返し返されてきた、幼少期に略奪されるようにして二条院に移ったはかないわが身への悩み、冷やかな世評や源氏の過剰な愛への苦悩などは薄れ、どこか達観的に自らを捉えている。特に、源氏の悲嘆を振り切って死ぬのを「思ひ限なかるべければ」と、源氏との仲を肯定的に捉える思考が目される。

紫の上の自己認識がどことなく変わるのはいかならうか。これを考えるために、まずは蘇生した紫の上を源氏が見舞う場面に注目したい。庭を見る紫の上は「らうたげ」(若菜下・二四四) で、洗った髪は「きよらにゆらゆら」(同) しており、「透きたるやうに見ゆる御膚つき」(同) であった。このような紫の上の容姿の

描写は、「扇をひろげたるやうにゆらゆら」(若紫・二〇六)、「つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじうつくし」(同・二〇七) と北山の春に走り出てきた少女の姿に不思議と重なるように思われる。そして紫の上は、二条院の「心ことに繕はれたる遣水、前栽の、うちつけに心地よげなるを見出だし」(若菜下・二四五)、「あはれに今まで経にけるを思ほす」(同) と生還した感慨に浸る。このまなざしもまた、二条院に連れ出されたのち源氏が誘う「遊び」によって心を開きはじめた紫の上が、「たち出でて、庭の木立、池の方などのぞきたまへば、霜枯れの前栽絵にかけやうにおもしろくて」(若紫・二五八) と、二条院の素晴らしさに目を向ける場面に似ている。この二つの叙述は、庭を眺める紫の上の視点の動きが似ているのである。六条院への引つ越し(少女巻)や、秋好中宮との春秋比べ(胡蝶巻)の際には、紫の上の住む春の御殿の庭も描写されるが、これらは語り手による描出であって、紫の上が見た叙述ではない。六条院の春の町の庭は、紫の上の目を通しては描かれないのである。一方で、二条院に移ってきたときに重なるように、病から一命を取り留めた紫の上の眼と心を通じて二条院の庭が描かれるのは、このとき紫の上の中に、幼少期の心が呼び覚まされていることの暗示なのではない

か。無邪氣に源氏の「娘」と思い、参内する「源氏の君」に想像をたくましくしていた、「雛遊び」を通じて源氏が深く紫の上の中に入り込んでしまふ以前からの心持ちである。紫の上はもう一度その頃の自分に回帰していくのだ。

こうした紫の上の変化がよく窺えるのが、夕霧巻での紫の上の心中思惟である。夕霧と落葉宮の醜聞について「宿世といふものがれわびぬることなり」（夕霧・四五六）と源氏が批評するのを聞いて、紫の上は独り「女ばかり、身をもてなすさまところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしきも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは」（同）と、女の生き方に想いを馳せる。「おとなしく引きこもるのだったら、何によつてこの世を生きている喜びを味わったり、無常な世の中で所在なさを慰めたりするのだろうか」と思うのである。そして、「わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ」（同・四五七）と、自身の身の処し方にも思考をめぐらせるのだが、細流抄<sup>注20</sup>はこの心内語を「中庸をいへり。女の一生を無事にておくらん事はありがたし」という内容だと評している。これは、女一の宮を思つての心内語ではあるが、客観的に女の生き方をも考えており、自らの苦悩を離れ自分自身を冷静に見

ているのである。しかも紫の上がここで、単なる中庸の讃美ではなく、むしろ中庸であるべき女の生き方に対して抗っていることに注目したい。例えば、蜩巻で源氏と明石の姫君の物語を選んでいた場面では、源氏の言葉を受けて、「心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。うつほの藤原の君のむすめこそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すくよかに言ひ出でたる、しわざも女しきところなかめるぞ、一やうなめる」（二二四—二二五）と、紫の上は「すくよか」に自己主張するあて宮を批判していた。源氏の女君として、そして明石の姫君の教育者として、自己抑制を女らしきとする女君であつたのである。しかし、夕霧巻で「女一の宮の御ため」（四五七）を思う紫の上は、女君の生き方として、中庸がよいと認めながらも、それに抗う自身の思いも吐露し、その意味では教育者になりきれていない。中庸を良しとする源氏の教えの通りの、源氏の理想の「女君」紫の上は、「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠の中に籠めたりつるものを」（若紫・二〇六）と、型破りの自由な「遊び」に興ずる少女として登場した。祖父も父母もおらず、病がちの祖母と共に都を離れて北山に身を寄せていた紫の上は、雀をつかまえ、「走り」（同）遊ぶという、野放しの「遊び」個性のままに放置されていた。だからこそ源氏は、祖母すら亡くなった後はさら



うようにして手元に置き、紫の上の教育者、あるいは管理者である「近しい人」として入り込むことができた。こうした生い立ちによつて紫の上は身のはかなさを嘆くことにもなったのだが、二条院に戻り、幼少期の心に戻つていった紫の上は、中庸の生を「生き難い」としつつも、単なる中庸では生きる甲斐がないとし、ある意味源氏とは違うまなざしで女の生を捉え直している。

こうした紫の上の心持ちの変化は、源氏との仲にも影響を与えていたのではないか。源氏と紫の上の二つの贈答歌に、その変化が窺える。まず、蘇生後のやりとりである。二条院を感慨深くみつめた（前掲・若菜下二四五）紫の上は、紫の上の回復を喜ぶ源氏に、「消えとまるほどやは経べきたまさに蓮の露のかかるばかりを」（若菜下・二四五）と詠みかけ、源氏も「契りおかむこの世のならでも蓮葉に玉ある露の心へだつな」（同）と返す。この紫の上の歌は朝顔巻の「こほりとち石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながる」（四九四）の歌とよく似た形をなしている。すなわち、朝顔巻でも、「月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽のかげ心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の水もえもいはずさき」（四九〇―四九二）と、見つめる人の感情を内包しているような風景描写があり、その後紫の上の「こほりとち」詠が登場する。この「こほりと

ち」の歌は、先の冬景色から紫の上が、「氷が閉じた岩間の水」と天上に澄む月とを選び出し、自然の景のなかに自らの思いをよそえた歌である。<sup>注21</sup>「石間の水」は、『紫式部集』などの用法を見れば、男性との関係性につながれ生き続けるしかない女性の心の表象として、それぞれの生を女たちが受け入れて生きなければならぬ悲しみがうかがいあがる語であるという。<sup>注22</sup>「とち」にいる水は、紫の上の、源氏にすがつてしか生きられない状況や行き場のない孤立を表しているのだろう。つまりこの歌は、源氏に育てられ、他に頼るところもない身のはかなさへの不安を含む歌である。これと比較すると若菜下巻の蓮の歌は、愛執からふっきれた己の命を見つめ、「命」のはかなさについて詠んだ、<sup>注23</sup>あるいは一瞬のまたたきに生きる人間への慨嘆や、それを包み込む極楽浄土のやさしく澄んだ恩恵を語りかけるなどの、人間への共感が認められる。<sup>注24</sup>とされる。自身の身のはかなさの苦しみを見つめる朝顔巻の歌と違って、自分の回復に喜ぶ源氏を見て、近いうちに世を去るであろう哀しみを見つめる歌のように思う。つまり、親との縁薄く頼りない紫の上固有の身のままならなさに「とち」られた苦悩ではなく、誰もがいつかは死を迎えねばならないという一般的な、人間のはかなさを見つめた歌だということである。蓮の歌では、現世の栄華と辛酸とを味わった源氏と紫の上が一緒に見ているのは、

共に生きてきたこれまでへの無常観であり、二人の物語の歴史が凝縮、投影されているといわれる。朝顔巻の「こほりとち」の歌も、紫の上がまなざしでとらえた風景の中に自己を能動的に捉える点は同じであるが、若葉下巻になると、わが身のはかなさとは離れた心持ちで人間というものを捉えられるようになっていく。

次に、御法巻の紫の上の最期の歌、「おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露」(五〇五)について考えたい。これは「ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな」(御法・五〇五)という源氏の歌と、明石の中宮の「秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見ん」(同)という歌と共に歌われ、唱和のかたちをとっているが、紫の上のこの歌を(辞世の歌)とした場合、紫の上の生涯の意味が詠みこまれているという指摘がある。自分自身についてさらに考えを深めていくのである。紫の上は自分が死んだあとの、源氏の悲嘆のさまを思いやり、目の前のさびしい秋の風にあおられる庭の情景に託して命のはかなさを詠み、常ならぬ世という非常な摂理を静かに語りかけている。紫の上はここでも「世」を見つめているが、御法巻で描写される紫の上は、「残りすくなし」(四九八)と命の長さをはっきりと悟っており、春の二条院での催しを「今日や見聞きたまふべきとちめなるらむ」(同)と「さ

しも目とまるまじき人の顔どもも、あはれに見えわた」(同)している。今まで自分の人生に関わって来た何気ない風景を最後にかみしめる紫の上。「この世に飽かぬことなく」(御法・四九三)ともあり、明石の君や花散里に歌を詠みかけ、景色や物、自分の周りの一つずつに、別れを告げているかのようなのである。紫の上は自分の周りの人・物を一つ一つ見つめている。この最期の歌は、絆を確かめ合う歌でも、恋の恨みを訴える歌とも違う、人の世というものの深い感慨を源氏に詠みかける歌である。<sup>注29</sup>朝顔巻の「こほりとち」や連の歌では、長い自然描写の中に紫の上の気持ちが見出されてきたが、最期の歌の前の自然描写は「風すこく吹き出でたる夕暮に、前裁見たまふとて」(御法・五〇四)と短い。紫の上は景のなかに自らの心を見出すというよりも、自身の気持ちを源氏に語りかけるために、風に乱れる萩の上の露を歌う。はかない我が身の苦しみを訴えるのではなく、人の世を生きるものすべてが背負う無常の哀しさを、男女の仲を超えた、人としての連帯感と共に源氏に語りかけ、<sup>注30</sup>夜明けに消える露のように静かに死に向かっていった。

光源氏の手元で育てられた幼少期を、身のはかなさの基として否定するのではなく、苦悩にも満ちた源氏との「つながり」として受容していった紫の上であるが、最期の彼女を支えていたの

は、あるいは「遊び」によって源氏とつながっていた幼少期だったのではないか。雀を追ひ、雛遊びに夢中だった紫の上の日日に入ってきた光源氏は、ときに養育者として教え諭しながらも、一方でその住人となって、同化し一緒に遊んでもいたのである。新枕の後の紫の上は、源氏と過ごした闊達な、無垢の馴れ睦びの日々を過去に置き去って、源氏の理想の「女君」として新たな関係を築いてきた。女三宮の降嫁ののちは、源氏に育てられたゆえの身のはかなさに苦悩し、幼少期からの絆に全幅の信頼をおいて紫の上の愛と信頼を求め続ける源氏に苦しめられもした。しかし幼少期の闊達な心を見つめ、とりわけ祖母の死の後も雛遊びに興じ得た日々の「近しい人」、光源氏との「つながり」を見つめ直したことで、特異な関係で結ばれた、源氏が居てこそその自分の生を肯定する。源氏に育てられた幼少期だったからこそ生じた愛の時間であり、また身のはかなさの苦悩でもある、自分の全てを人の世の生として受け入れていったのである。

## 五、まとめ——幼少期を描く意味

紫の上はその登場から遊びという個性を付与されて、活発な少女として生き生きと描かれてきた。源氏に引き取られてからは特に雛遊びによって、「例ならぬ人」であった源氏を「近しい人」

へと受け入れてゆき、源氏が「親」のようなポジションに入り込むことによって、肉親にも近い親密な関係や源氏と強い心のつながりを築いていった。しかし、幼少期から源氏と過ごしてきたことは、「娘」と「妻」が地続きになっただけで、紫の上は、そうした自身の幼少期を苦悩ととらえたまま生涯を閉じるのではない。紫の上は病となり、源氏を取り乱すのを見て、源氏のために生きる自らの生を肯定する。そして幼少期に回帰し、その頃の心持を思い出しながら、源氏との関係を捉え直していくのである。身のはかなさに苦しんでいた紫の上であったが、源氏と歩んだ人生を受け入れているところに源氏に対する強い絆がある。幼少期に戻っていった二条院での最期の日々は、源氏との関係を捉え直し、今までの絆を紫の上の中に再び思い起こす大切な時間であったのである。

注

注1 加藤理『ちご』と『わらは』の生活史』慶應通信株式会社、

一九九四年

注2 注1に同じ。

注3 川名淳子「王朝文化と子ども―遊び―が語る子どもの領域」(秋

澤互、川村裕子編『王朝文化を学ぶ人のために』世界思想社、

二〇一〇年)

注4 注1に同じ。

注5 注1に同じ。

注6 注1に同じ。

注7 注3に同じ。

注8 川名淳子「雑遊び小考―若紫の君の「雑」―」(『東横国文学』三二号、

二〇〇〇年)

注9 注3に同じ。

注10 注1に同じ。

注11 注3に同じ。

注12 注3、注8に同じ。

注13 川名淳子氏の論文をはじめとして、森野正弘「若紫君と雑遊び・絵

―末摘花巻の時間と言語―」(『王朝文学史稿』二二巻、一九九六年)

など雑遊びと絵は同じ「遊び」としてとらえているものが多いよう

に思う。

注14 注3に同じ。

注15

清水好子『源氏物語の女君』塙新書、一九六七年「侍女たち」において、この少納言の行動は「彼女の決意の瞬間」であり、「奇妙な求婚の場において、媒介としてまことに臨機応変に振舞った」と述べている。

注16

吉海直人「少納言(紫の上の乳母)」(同氏著『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』世界思想社、一九九九年)や、吉井美弥子「紫の上と少納言の乳母、そして女房たち」「存在」と「不在」の意義」(久保朝孝他編『端役で光る源氏物語』世界思想社、二〇〇九年)による。

注17

注16に同じ。

注18

新編日本古典文学全集『源氏物語』④八八頁頭注九に、「紫の上はすでに明石の女御御入内の折には輦車の勅許があるなど、社会的地位も高い。」とある。

注19

新編日本古典文学全集『源氏物語』①四二二頁の長恨歌より。

注20

新編日本古典文学全集『源氏物語』④四五六頁―四五七頁頭注一四より。

注21

鈴木裕子「源氏の歌ことば―朝顔巻の光源氏と紫の上―」(河添房江他編『交渉することば』叢書想像する平安文学 第四巻、勉誠社、一九九九年)

注22

注21に同じ。

注23

倉田実「紫上の蘇生」(『明治大学日本文学』第十一号、一九八三年)

注24

今井久代「隔て心なき」仲のかたち―光源氏と紫上の歌―(『日本文学』四五巻五号、一九九六年)

注25

鈴木宏子「紫の上の和歌―育まれ、そして開かれていく歌―」(池田

節子他編『源氏物語の歌と人物』林書房、二〇〇九年）

注26 李美淑「二条院の池―光源氏と紫の上の物語を映し出す風景―」（『中

古文学』七〇巻、二〇〇二年）

注27 倉田実「紫の上の〈辞世の歌〉」（『平安文学研究』第七十七輯、一九八七年）

注28 注24に同じ。

注29 注24に同じ。

注30 注24に同じ。

※紫の上の呼称については、本論では「紫の上」に統一した。また、本文の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。本文中の傍線部や①などの記号は、論者（岩村）が付したものである。

（いわむら りようこ 二〇一五年修士課程修了）